

でよいということには到底ならず、かかる事態を回避するためには、RCIC の水源を S/C に切り替えた後、早期の段階から、S/C 圧力、温度を監視<sup>75</sup>するとともに、消防車を用いて FP 系から原子炉に注水するラインを構成しておき、S/C の状況に応じ、RCIC の停止を待たずに、原子炉減圧操作をして FP 系注水に切り替える必要があった。

- ③ この点、吉田所長は、2 号機の RCIC の作動状態について詳細を把握していなかったものの、1 号機 R/B の爆発後、速やかに 2 号機についても注水や原子炉格納容器ベントの準備をするように指示をしていた。そして、2 号機の RCIC が作動中である 3 月 13 日には既に、3 号機 T/B 前の逆洗弁ピットから 2 号機原子炉に注水するラインが構成され、1/2 号中央制御室では 12V バッテリー合計 10 個を接続して SR 弁による開操作の準備も整えていた。ただし、当時、3 号機 T/B 前の逆洗弁ピット内の水量が少なく、3 号機原子炉に優先的に注水する必要があったため、2 号機原子炉への注水を開始できなかった。

他方で、2 号機の S/C の圧力や水温については、少なくとも吉田所長や当直において、当時、RCIC の作動状態に関する問題意識が薄く、監視の必要性が十分意識されていなかったため、同月 14 日 4 時 30 分頃まで、全く把握されていなかった。

結局、2 号機の S/C 圧力の計測を開始したのは同月 14 日 4 時 30 分頃からであり<sup>76</sup>、その時点で S/C 圧力は、S/C 圧力計によれば 0.467MPa abs を示し、その後も上昇傾向にあり、同日 12 時 30 分頃の時点で 0.486MPa abs まで上昇していた。さらに、2 号機の S/C 水温の計測を開始したのは同日 7 時頃からであり<sup>77</sup>、その時点で S/C 水温は、S/C 水温計によれば 146°C を示し、その後も

<sup>75</sup> S/C 圧力計の既設供給元電源は 120V 交流電源であるが、直流電源 24V を確保すれば、テスターで電圧測定し、圧力値に換算して計測可能である。そして、3 月 12 日未明には、広野火力発電所から 2V バッテリー 50 個が福島第一原発に到着しており、これを 12 個つなぎ合わせれば電源復旧して、S/C 圧力を監視することができた。

また、S/C 水温計は、交流電源 120V を確保すれば計測可能である。これは、同月 11 日から設置していた仮設照明用小型発電機の電工ドラムからケーブルを S/C 水温計につなぎかえれば、少なくとも、断続的に監視することは可能であったと考えられる。

<sup>76</sup> S/C 圧力計については、計器単体に 12V バッテリー 2 個を直列につなぎ込み、テスターで電圧測定し、圧力値に換算して計測した。

<sup>77</sup> S/C 水温計については、計器単体に小型発電機の電工ドラムからつなぎ込み、指示計を読み取る方法で計測した。